鳥取大学所蔵の考古資料（２）

－ 古墳時代の遺物：縁山古墳群出土遺物 －

高田健一*

Archaeological Collections of Tottori University (2)

- Artifacts of *Kofun* period : Artifacts from *En-yama* tumuli -

TAKATA Ken-ichi*

キーワード：学校所在考古資料，古墳時代後期，鉄刀，木製刀装具，絹布，砂丘遺跡

Key Words: Archaeological collections in school, Late *Kofun* period, Iron sword, Wooden scabbard and hilt, Silk cloth, Archaeological site at coastal dunes

Ⅰ．はじめに

縁山古墳群は，鳥取市福部町湯山字白路ヶ山（通称縁山）に所在する円墳群である。白路ヶ山は，福部砂丘の南縁部に位置する標高 25m ほどの丘陵で，周辺には砂丘遺跡として著名な直浪遺跡などがある（図１）。

1955 年，鳥取大学歴史学研究会に所属する学生が分布調査の際に発見し，同年に学生らによって 1 号墳の発掘調査が行なわれた。また，2 号墳は，その翌年に梨栽培の果樹園の施肥作業中に発見され，やはり同研究会の学生によって発掘調査が行なわれた。これらの発掘調査の成果は，佐々木古代文化研究所が発行していた月報『ひすい』に掲載された（大村・福井 1958，大村・治部田 1958）。一方，これとは別にまとめられた報告書として『鳥取県東部に於ける古墳調査報告』第 1 輯（以下，『報告』）が存在するが，ガリ版刷りで発行部数も少なく，広く知られるところとはなっていないと思われる [1]。『ひすい』に比べて，学生の課外活動という性格の強い文章や内容となっているが，この『報告』にしか掲載されていない写真がある。

出土品は，ある時期までは鳥取大学学芸学部で保管されていたものと思われるが，その後のキャンパス統合移転，教育学部への改組などの過程で，多くを紛失してしまったものと考えられる。少なくとも 1988 年に大学所蔵の文化財が整理された段階には 2 号墳出土の鉄刀 1 本以外の遺物は存在していなかったようである（平勢1988）。

小稿では，『報告』の内容をも踏まえて，縁山古墳群の概要を記すとともに，現存する 2 号墳の鉄刀についてはこれまでに実測図がなかったことから，新たに作図して観察結果とともに示す。

Ⅱ．縁山古墳群の概要

縁山古墳群は，これまでに 4 基の古墳が存在したと考えられるが，3 号墳とされたものは，未調査ながら正確な所在地を現地で確かめることができず，現存するかどうかも定かでない。4 号墳は，2004 年に国道 9 号線駟馳山バイパス建設工事に伴って新たに発見されたもので，福部村教育委員会によって発掘調査された（谷岡 2004）。

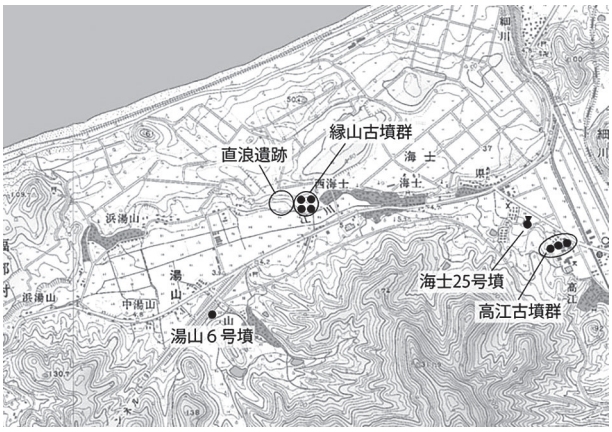

図１　縁山古墳群の位置

*鳥取大学地域学部地域学科

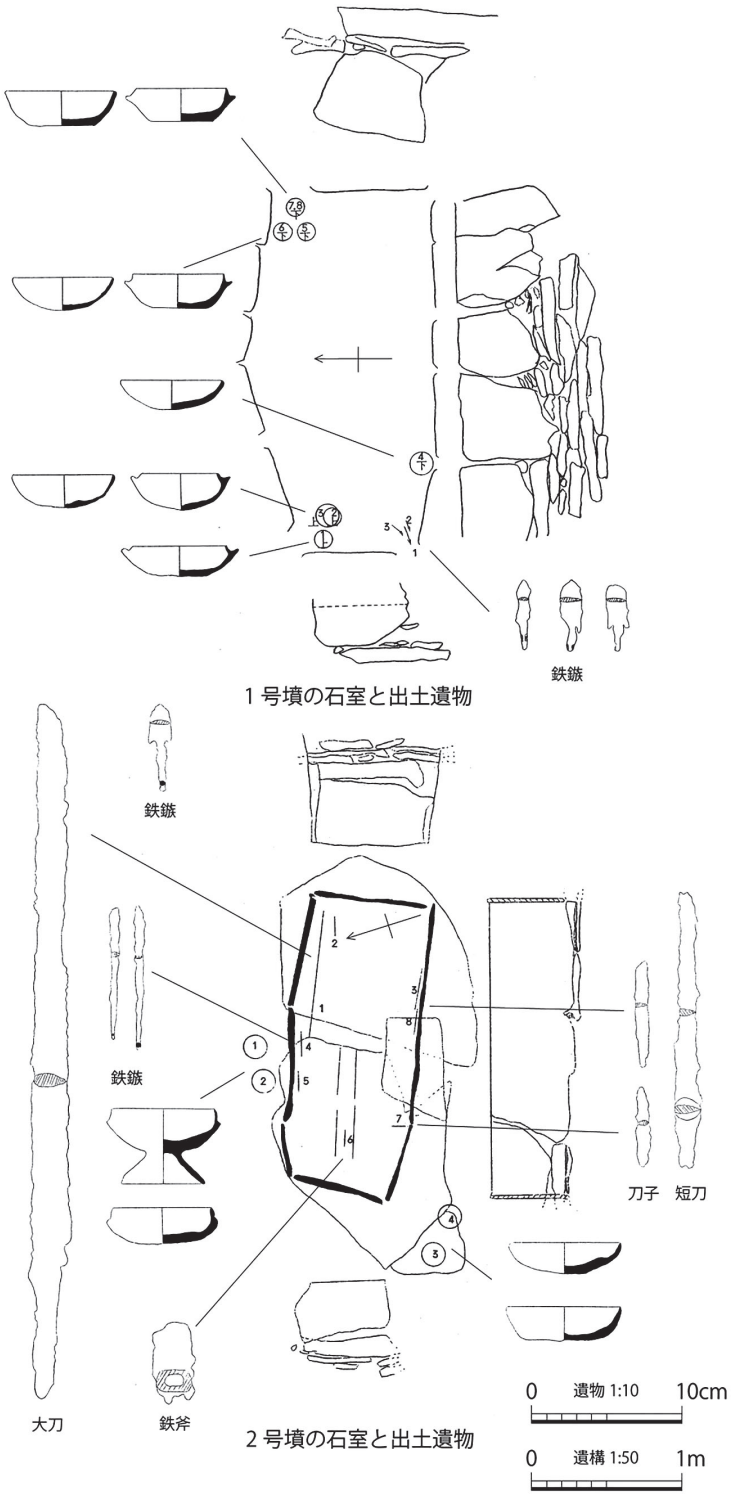

図2　縁山1,2号墳の埋葬施設と遺物

1号墳は，発見時にすでに墳丘の多くを失っていたようで，規模不明であるが，小円墳と観察されている。表土下40cmの位置に長さ2.3m，幅1m前後の埋葬施設が存在した（図2上）。この埋葬施設は，上半部に扁平な割石を小口積みしていることから，竪穴式石室と類似した外観を呈しているが，下半部は同様な扁平な石材を立て並べて埋葬空間を作っており，箱式石棺と同様な構造をなす。このような埋葬施設は石棺系小竪穴式石室と呼ばれており，これ自体が直接遺骸の収納容器となることから，箱式石棺と同じ機能を果たすと考えられている。類例は，古墳時代前期後半の山陰～丹後地域に多いが，福部周辺では古墳時代後期の類例が散見される（亀井2000，吉田2002）。

1号墳の出土遺物としては，棺内北東隅で坏身，坏蓋が2点ずつ，棺内西側で坏身，坏蓋が2点ずつ計8点，南西隅で鉄鏃3点が報じられているが，いずれも現物が行方不明である。当時の実測図からは須恵器の型式学的な特徴を十分に読み取れないが，口径は坏身で10～12cm前後，蓋は13～14cm前後を測り，やや小型と言える。『報告』に掲載された写真（図5-3）によると，坏身は口縁の立ち上がりが弱く，蓋も低平に見える。古墳時代後期末（TK209型式段階）に比定しうると思われる。

鉄鏃は，逆刺がある平根系が2点，鏃身が柳葉形を呈するもの1点があり，いずれも残存長は9cm前後のようだ。

2号墳は，1号墳とは異なって，板状石材の長辺側を横位置に設置して通有の箱式石棺状に組むもので，上部の積石も少ない。長さ1.9m，幅0.8mの埋葬施設である（図2下）。発見時に蓋石は未開封だったようで（図5-4），副葬遺物や人骨は原位置を保っていたと考えられる。

出土遺物としては，須恵器4点のほか，鉄刀2点，鉄鏃3点，鉄斧1点，刀子2点と考えられる。大刀以外の遺物は行方不明であり，個々の器種は明確にし難い。須恵器はいずれも棺外で出土したものらしい。須恵器の時期判断はやはり難しいが，実測図では，口縁の立ち上がり部は1号墳の物に比べて高く描かれている。また，鮮明ではないものの，写真からは坏蓋天井部と口縁部の境界付近には凹線が認められる（図5-11）。したがって，1号墳

よりは古く，古墳時代後期後半（TK43 型式段階）に遡る可能性がある。

鉄刀は長さ 87.8cm の大刀と長さ 64.1cm の短刀があり，いずれも木質がよく残っていた。大刀は被葬者の右側，短刀は左側から出土している。写真で判断する限り，大刀は切先を足元に，刃部を被葬者側に向けていたようだ（図 5-6）。鉄鏃は，逆刺のある平根系のもの 1 点と長頸鏃と考えられるもの 2 点があり，いずれも被葬者の右側から出土している。鉄斧は被葬者の足元，刀子 2 点は，被葬者の左側の壁沿いで出土している

2 号墳では，石棺内に遺存状態が良好な人骨が見つかっている。当時鳥取大学医学部に在籍していた小片保によって鑑定が行なわれ，熟年終わり頃の男性であるとされた他，頭骨各部位の計測値も示されて，他の古墳時代人骨と概ね似た特徴を持つとされた（小片 1958）。なお，この人骨は新潟大学医学部において小片コレクションとして保管されている。

4 号墳は，墳丘盛土や埋葬施設が完全に削平されていたため，周溝しか検出されていない（図 3）。周溝から復元できる墳丘は，径 16.5～17.0m の円墳である。周溝の幅は約 2.5m，深さは 1.15m を測る。周溝の北西部分に幅 2m ほどの掘り残し部分があり，陸橋をなしていた。

墳丘や埋葬施設は削平を受けてほぼ失われていたが，周溝内で須恵器片と副葬品とおぼしき刀子，砥石が見つかった。須恵器片は天井部のみで回転ヘラ削りの範囲が狭いということ以外に時期比定の手がかりはないが，古墳時代後期後半（TK43 型式段階）以降に位置付けられよう。

刀子は棟関をもつタイプで，全長 14.5cm に対して茎長 6.0cm と茎の割合が大きい。このような特徴は古墳時代後期後半に類例が多いものであるから（渡邊 2010），須恵器が示す時期と調和的である。砥石は安山岩製で提砥と考えられる。

Ⅲ．2 号墳出土の鉄製大刀

2 号墳出土の大刀は，『報告』によると出土時には完形品であったが，遺跡見学に訪れた者が不用意に取り上げたことによって 3 片に破損したそうである。元は 87.8cm とあるが，現状では切先を失っており，2 片に別れた状態である。現存全長は 74.5cm あり，

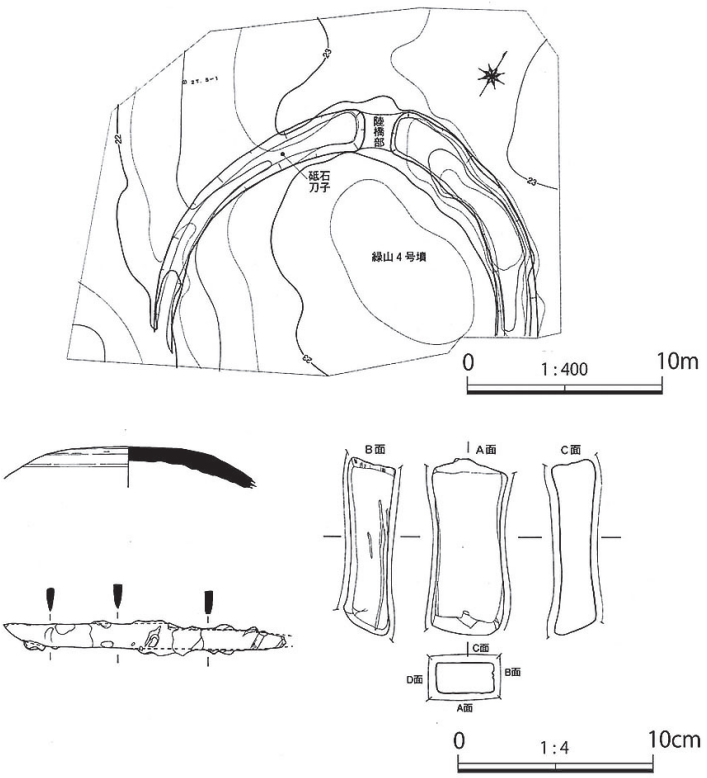

図 3　緑山 4 号墳の墳丘と遺物

おそらく，10 数 cm の切先片は他の遺物とともに失われてしまったのであろう。刃部の残存長は 60.5cm であるが，茎はほぼ完存して 14.0cm を測る。刃部幅は 3.5cm，茎幅は 2.4cm である（図 4）。直角片関であるが，茎の細部の形状はよくわからない。また，茎のほぼ中央に目釘と思われる部分があるが，1 箇所のみかどうかわからない。

柄，鞘ともに木材がよく残り，鞘の表面に巻かれた布も極めてよく残存している。残存状態の良い方を A 面，悪い方を B 面とすると，A 面が出土時の下面だったと考えられる。

鞘木と柄木は樹種が異なるようで，関の部分で異なる部材が接する様子を観察できる（図 4，B 面）。柄木は広葉樹のようであるが，鞘木は針葉樹（図 4，A 面写真上）のようである。残存状態の良い A 面では，鞘口の幅 2cm ほどの部分が一回り太く作られて，鞘身とは段差があったことが判明する。

鞘木の身の部分に巻かれた布は，非常に残りがよく（図 4・A 面写真中），布を鑑定した澤田むつ代によると，2 種類の織物があり，鞘木に接するのは経糸 24～26 本，緯糸 12 越前後の平絹と考えられ，幅 3.5～4.0cm の帯状の裂が密に巻きつけられているという（谷岡 2004，澤田 2015）。一方，絹布の上に乗るもう 1 種類の織物は，やや粗い繊維であり，絹で

はないと思われる[2)]。鞘袋のようなものが存在した可能性が考えられる。

柄の残存状態は良くないが，2枚合わせで，茎落とし込み式と考えられ，全体を糸巻きしているようである。糸の残存状態も良くないが，いわゆる「二本芯並列コイル状二重構造」（澤田2015）の糸巻きが施されたと考えられる（図4・A面写真下）。

なお，記録が残っていないので不明であるが，化学的な保存処理を受けた形跡があり，欠損した部位には樹脂による補修が施されている。

Ⅳ．おわりに

縁山古墳群は，砂丘遺跡として著名な直浪遺跡に近接して存在する。直浪遺跡では，かつて古墳時代後期後半と考えられる竪穴住居跡が調査されたほか（治部田 1976），古墳時代に形成されたクロスナ層の上位から，後期後半段階の須恵器（陶邑編年のTK43 型式～TK209 型式）が多く出土している。古墳時代後期段階にクロスナ層が形成されて，海岸砂丘地帯が人間活動の舞台になる現象は日本列島の広い範囲で認められる（遠藤 1969 など）。近年の直浪遺跡の調査成果によると（高田 2018），古墳時代後期後半のクロスナ層には多量のイネプラントオパールやイネ花粉が含まれており，稲作の可能性が示唆される。砂地であるから，陸稲と考えられるものの，砂丘表面が土壌化したことによって砂丘を耕作地として開拓していく動きがあったと推測される。縁山古墳群の被葬者は，その担い手たちであろう。

砂丘遺跡に関係する古墳群については，調査例としては湯梨浜町長瀬高浜遺跡が著名であるが，このほかにも鳥取市湖山村の箱式石棺（新修米子市史編さん協議会 1999），同白兎身干山遺跡（豊島 1975），同宝木高浜遺跡（豊島・赤木 1964），湯梨浜町（旧泊村）荒浜古墳（鳥取県教育委員会 1973）などの小規模古墳，箱式石棺の発見例があった。しかし，いずれも工事中の不時発見などのために，十分な調査記録もないまま破壊されたり，出土品も不明な点が多い。したがって，縁山古墳群の出土品の多くが散逸して十分な検討ができない点は残念ながら，縁山古墳群は砂丘形成史と人間活動の関係を追究する上で貴重な事例と言えよう。

註

1)『報告』には，6×6 版のモノクロベタ焼きが直接冊子に貼付されている。小稿では，それらをスキャナーで取り込み，adobe 社の photoshop2020 を用いてコントラスト等を調整した上で使用した。

2) この繊維については，2017 年に（株）パレオ・ラボに委託した分析結果で，麻の可能性が指摘された。しかし，分析の主眼を C14 年代測定におき（ただし，年代測定試料としては不適当だった），繊維の性質については十分意識していなかったため，サンプリングした範囲が絹とされた部分を含んでいたのか，その上位に被さる粗い繊維を抽出したのか定かでない。今後，繊維の性質が明瞭に区別できる部分で，改めて分析を行ない，材質を確定する予定である。

文献

遠藤邦彦 1969「日本における沖積世の砂丘の形成について」『地理学評論』Vol.42No.3，pp.160-163

大村雅夫・福井淳人 1958「因幡・縁山 1 号墳」『ひすい』55，pp.1-4，佐々木古代文化研究室

大村雅夫・治部田史郎 1958「因幡・縁山 2 号墳（1）」『ひすい』56，pp.1-4，佐々木古代文化研究室

小片 保 1959「因幡・縁山 2 号墳（2）縁山古墳人骨について」『ひすい』57，pp.1-4，佐々木古代文化研究室

亀井熙人 2000「古墳時代・石棺系小竪穴式石室古墳」『新編福部村誌』上巻，pp.80-82，福部村

澤田むつ代 2015「古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例」『文化財と技術』第 7 号，pp.111-142，工芸文化研究所

治部田史郎 1976『直浪遺跡発掘調査報告』福部村教育委員会

新修米子市史編さん協議会 1999「新潟大学所蔵 小片保 山陰人骨コレクションリスト No.1086」『新修米子市史』第 7 巻資料編・考古，p.549

高田健一（編）2018『直浪遺跡の研究』鳥取大学地域学部

谷岡陽一 2004『縁山 4 号墳発掘調査報告書』鳥取市教育委員会

鳥取県教育委員会 1973『埋蔵文化財発掘調査概報』

豊島吉則 1975「山陰の海岸砂丘」『第四紀研究』第 14 巻第 4 号，pp.221-230

豊島吉則・赤木三郎 1964「気高町宝木高浜砂丘の形成について」『鳥取大学学芸学部研究報告（自然科学）』15 巻，pp.12-20

平勢隆郎 1988『鳥取大学所蔵文化財整理簡報』鳥取大学

吉田 学 2002「山陰東部の小竪穴式石室についての一考察」『島根考古学会誌』第 19 集，pp.65-97

渡邊可奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子」『古代学

研究』第 185 号，pp.21-37

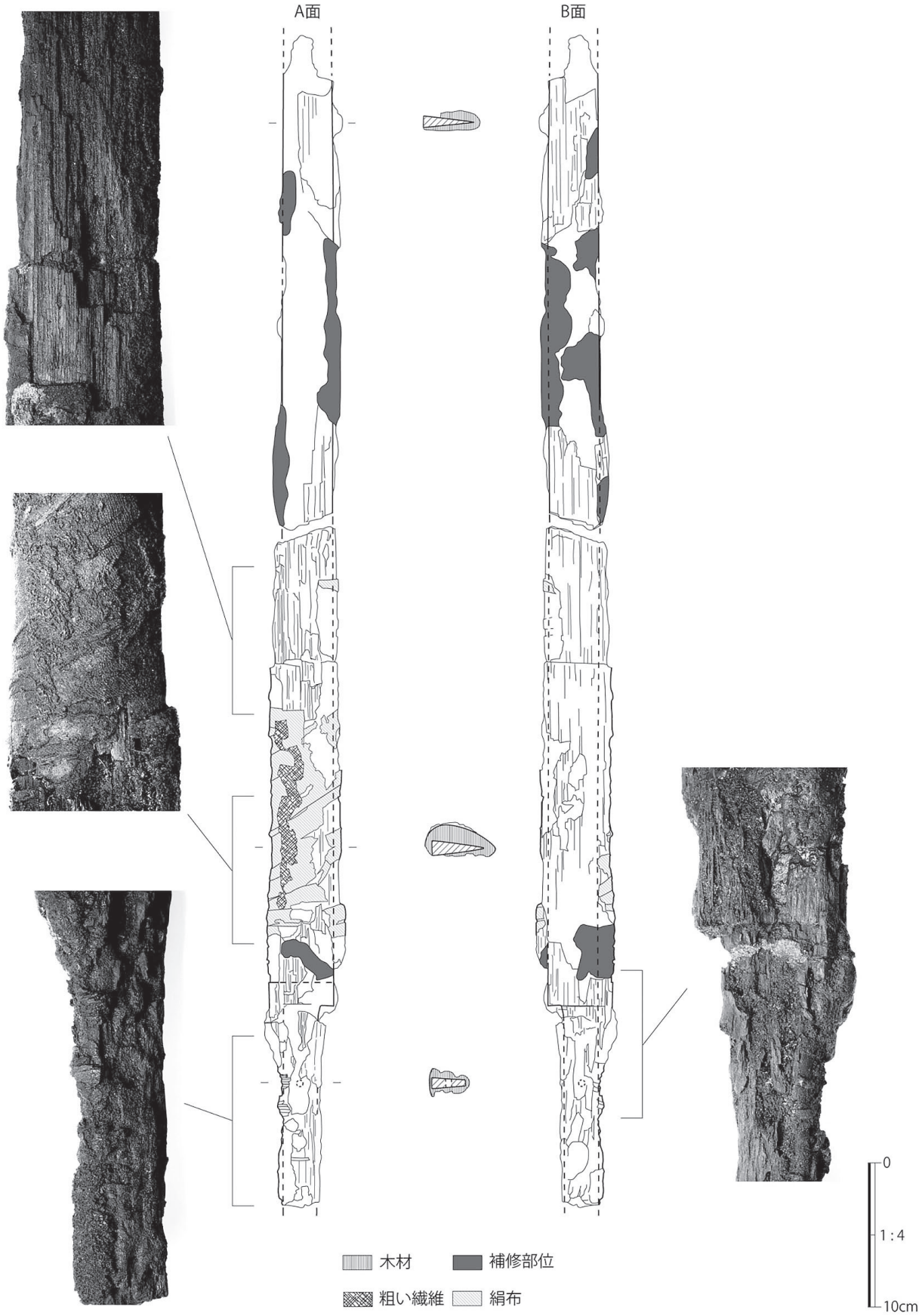

図 4　縁山 2 号墳の鉄刀実測図

1：1号墳南壁
2：1号墳須恵器出土状況
3：1号墳出土須恵器集合
4：2号墳石棺蓋石
5：2号墳石棺開封状況
6：2号墳人骨出土状況
7～9：2号墳須恵器出土状況
10：2号墳出土鉄器集合
11：2号墳出土須恵器集合

図5　『報告』所載の写真